

第17回

多摩東京移管120周年記念 「移りゆく多摩の景観と暮らし」 平成25年（2013）

平成25年は、多摩地域が神奈川県から東京府に移管されて120年目でした。この間、第二次大戦前から戦後復興、高度経済成長期を経て地域の景観や暮らしは大きく変貌してきました。本講座では、多摩各地の博物館で収集・調査の進む写真資料や、集合住宅歴史館に移築された昭和初期～40年代の集合住宅から、多摩の景観や暮らしの移り変わりを改めて考える講座となりました。

- | | | | |
|--------------------|-----------|---|----|
| □第1講 | 10月25日(金) | 変貌する農村―戦前から戦後の日野の暮らし―
講師 北村澄江（日野市郷土資料館嘱託員） | 80 |
| □第2講 | 11月8日(金) | 見学会 集合住宅歴史館―同潤会アパートから戦後の2DK・テラスハウス・高層アパートへ、集合住宅の歴史から見る多摩の団地―
講師 祖谷 太（都市再生機構技術研究所副所長）
会場 都市再生機構技術研究所内集合住宅歴史館 | 82 |
| □第3講 | 11月22日(金) | 村から街へ―多摩ニュータウン事業用写真を『読む』―
講師 清水裕介（公益財団法人多摩市文化振興財団学芸員） | 84 |
| ■北村澄江「多摩の歴史講座の思い出」 | | | 86 |

定員 120名

場所 国分寺労政会館（第2講は見学会、都市再生機構技術研究所内集合住宅歴史館）



集合住宅歴史館

平成25年10月25日 午後1時30分～3時30分

第1講 変貌する農村

—戦前から戦後の日野の暮らし—

北村 澄江（日野市郷土資料館嘱託員）

日野市は、東京都のほぼ中央部に位置し、面積は27.53km²、市域の北部には多摩川と浅川により形成された沖積地と日野台地、南部には多摩丘陵が広がっている。台地の周縁部には豊富な湧水があり、日野用水をはじめ、市域を網の目のように張りめぐらされた用水は、江戸時代直前より整備され、総延長は180kmにおよんでいる。

清流に恵まれた市域には、古くから人が居住し、歴史的遺産も数多く残っている。江戸時代になると、甲州街道の宿場としての日野宿のほか16の村が存在し、「多摩の米蔵」としての農村が形成された。明治になると、日野宿を中心とした日野町、豊田など浅川北岸の村をまとめた桑田村（明治34年日野町と合併）、多摩丘陵の村をまとめた七生村が発足、昭和33年（1958）2月に日野町と七生村が合併して日野町となり、昭和38年11月に全国559番目の市として市制施行し、今年11月3日で市制施行50周年を迎える。（平成25年10月1日現在 82,812世帯、179,348人）

①昭和戦前期の日野（日野町と七生村）

玉南鉄道（京王線）営業開始（大正14年）→日野橋開通（大正15年）→七生村が経済更生指定村となる（昭和7年）→東洋時計（オリエント時計）・六桜社（コニカミノルタ）・東京自動車工業（日野自動車）・富士電機・神鋼電機などの大工場が操業を始める（昭和11～18年）→中央線が複線化され日野新駅開業（昭和12年）

②昭和20年代の日野（日野町と七生村）

高幡山金剛寺不動堂・仁王門が国の重要文化財に指定（昭和21年）→日野中学校・七生中学校開校（昭和22年）→連合軍総司令官リッジウェイ大將が七生村を視察（昭和26年）→日野町役場完成（昭和29年）

③昭和30年代の日野（日野町と七生村→日野町→日野市）

日野町と七生村が合併して日野町となる（昭和33年）→都立多摩動物公園が開園（同）→多摩平団地への入居が始まる（同）→平山台土地区画整理事業が認可（昭和38年）→日野市市制施行（同）→京王多摩動物公園線開通（昭和39年）

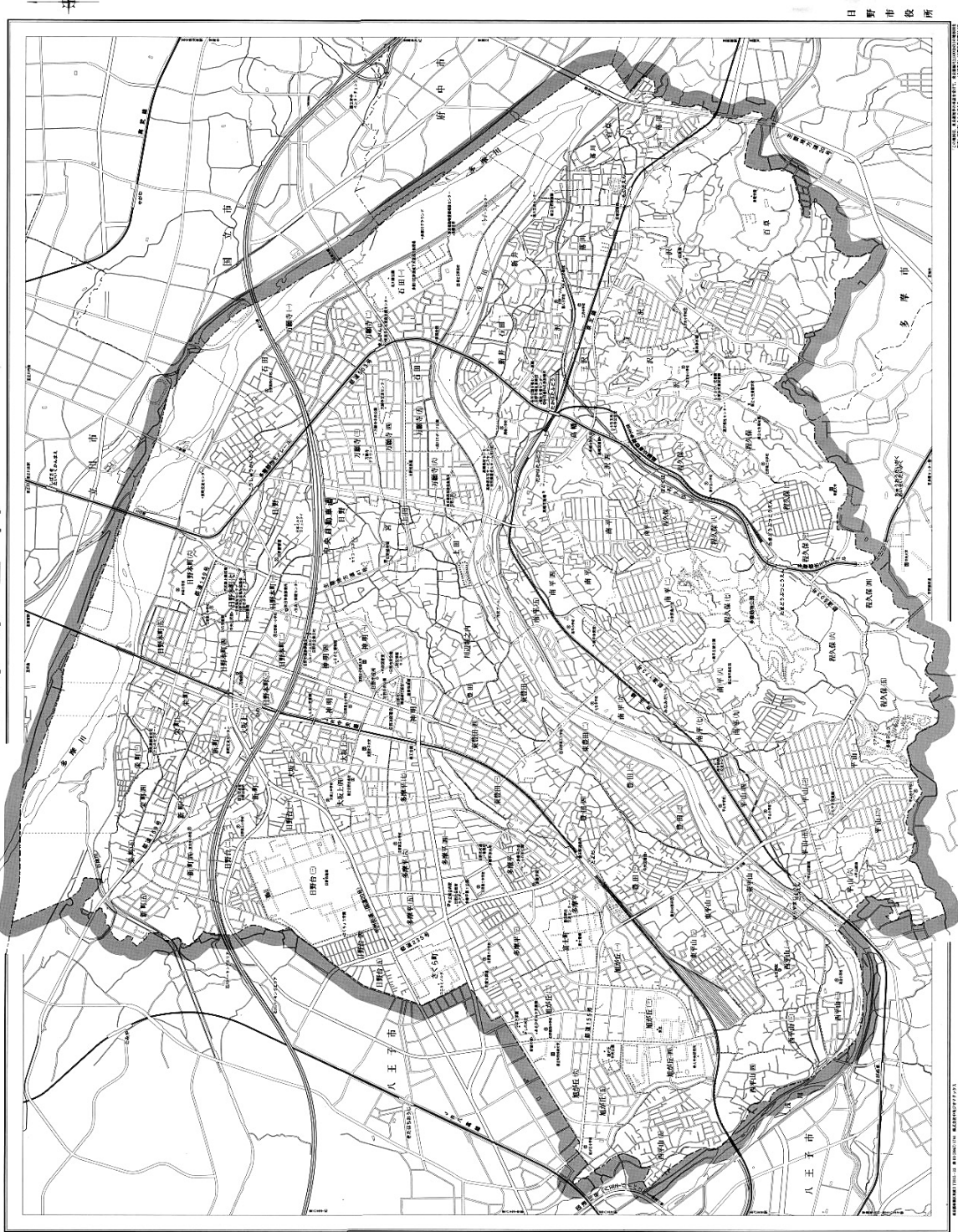
④昭和40年代の日野（日野市）

都立日野高校開校（昭和41年）→豊田電車区完成（同）→中央自動車道八王子―調布間開通（昭和42年）→百草団地入居開始（昭和44年）→水田のカドミウム高濃度汚染が判明（昭和45年）

⑤昭和50年以降の日野

市役所庁舎完成（昭和52年）→神鋼電機工場閉鎖（昭和54年）→日野桑園閉鎖（昭和55年）→多摩モノレール（株）が発足（昭和61年）

日野市全図



平成十七年三月作成

第17回

平成25年11月8日 午後1時30分～4時

第2講 見学会 集合住宅歴史館

—同潤会アパートから戦後の2DK・テラスハウス・高層アパートへ、
集合住宅の歴史から見る多摩の団地—

祖谷 太（都市再生機構技術研究所副所長）

○集合住宅の歴史

- ・戦前～1945
- ・戦後1946～1955
- ・もはや戦後ではない1956～1965
- ・大量供給時代1966～1975
- ・多様化、個性化1976～1985
- ・昭和～平成へ1986～1995
- ・震災復興、マンション建替え1996～

○都市再生機構の歴史

○UR賃貸住宅のストック（2013年現在）

○UR賃貸住宅の戸数

○技術研究所の研究テーマの変遷 新規建設から既存ストック活用へ

○技術研究所の施設のご紹介

○同潤会代官山アパート

財団法人同潤会は、関東大震災の復興を目的に大正13年（1924）に設立された公的な住宅供給団体です。電気やガス、水洗便所を備えた鉄筋コンクリート造のアパートメントは、わが国における近代的な集合住宅のさきがけとなりました。

昭和2年（1927）に入居がはじまった代官山アパートの世帯住戸と独身住戸を復元展示しています。

○蓮根団地 2DK55型

西山卯三らの基礎的な研究により、集合住宅に関して「食寝分離」「適正就寝の確保」等の新しい住宅に対する考えが確立します。東京大学吉武研究室が原案を作成した公営住宅標準設計の51c型では、2寝室の確保と食事のできる台所が提案され、その後の住宅設計に大きな影響を与えました。

戦後初期の集合住宅におけるテーマのひとつであった「食寝分離」に答えたのがダイニングキッチン（DK）です。ダイニングキッチン以外に2寝室を持つこのタイプは2DKと呼ばれ公団住宅の代名詞ともなりました。

○多摩平団地テラスハウス

日本住宅公団は、昭和30年（1955）の発足当初から、主に郊外の住宅団地でテラスハウスの建設をおこないました。短期間で大量の住宅を供給するため、設計の標準化、規格部品の開発などの合理化をはかるとともに、より反復生産に適した形を追求する、すなわち工業化に積極的に取り組みました。

○晴海高層アパート

晴海高層アパートは、昭和32年（1957）に入居が始まった晴海団地の中にある総戸数168戸鉄骨鉄筋コンクリート造10階建の集合住宅です。設計は日本を代表する建築家である前川國男が行いました。住戸規模

の可変性を持たせた構造体、スキップ形式のアクセス方式、従来の寸法にとらわれない畳形状など、設計者による合理性の追求が多く見られます。こうした可変性は現在の住宅設計に通じるものがあります。

○住宅用電気設備の変遷

日本住宅公団発足当時から現在に至るまで公団住宅に使用されていたスイッチ・コンセント、インターホン、ブレーカー（分電盤）などについて、年代ごとに代表的なものを展示・保存しています。

○住宅設備の変遷

昭和35年（1960）に公共住宅規格部品制度（KJ）が、昭和48年（1973）に性能規定を導入した優良住宅部品認定制度（BL）を発足しました。この2つの制度を通して、住宅部品が普及し、産業が育ち、住宅設備の向上がはかられました。

○超高層住宅実験タワー

超高層集合住宅における技術的課題に対処するため、特に実地検証実験が必要な課題の実験等を行うための施設として設置されました（平成3年建設）。高さ108m（36階相当）、12m毎に床を設置。



講義風景



同潤会代官山アパートの展示



日本住宅公団 蓮根団地の展示

平成25年11月22日 午後1時30分～3時30分

第3講 村から街へ

—多摩ニュータウン事業用写真を『読む』—

清水 裕介（公益財団法人多摩市文化振興財団学芸員）

1. 地域史料としての写真

- ・古写真の時代…外国人による風景写真、肖像写真、集合写真
- ・明治30年代以降、数々の名勝絵葉書が登場。多摩の場合、大正期以降に高尾山・多摩御陵・大國魂神社・奥多摩・秋川など
- ・学校写真、記念写真の時代
- ・35mm フィルムカメラの一般化…家族写真、子供、旅行、身近な風景
昭和30年代末から40年代に一般家庭に急速に普及
- ・おもちゃカメラ（フジペットシリーズ 1957年～）
- ・ハーフサイズカメラ（オリンパスペンシリーズ 1959年～）
- ・露出計の内蔵…国産一眼レフではコニカ F（1960年発売）で初めて内蔵
→さらにシャッター速度優先オート（オリンパスオートアイ・1960年）／絞り優先オート（ヤシカエレクトロハーフ・1966年）／フラッシュ内蔵（コニカ C 35 E F 「ピッカリコニカ」・1975年）／オートフォーカス（コニカ C 35 A F 「ジャスピコニカ」・1977年／ミノルタ α 7 0 0 0 ・1985年）など技術革新が進み、写真はより手軽・身近に
→現在は、身近になった時代の写真が地域資料として、地域の博物館・資料館・図書館などに寄せられるようになり、

今後しばらくは点数が増加していく見通し。

2. 「多摩ニュータウン」という地域性…写真を中心に考える

- ・丘陵地に大規模な都市を建設する決断…深刻な住宅難／南多摩のスプロール化の防止
- ・多摩 N T
開発による地域の景観の大きな変化。どの地域も時間が経てば大きく変化するが、多摩 N T の場合、広範囲に渡って地形が大きく改変。特に初期の造成・開発区域である多摩市域で顕著。街場が発展したのではなく、ヤマ・ムラから街への大転換。
- ・30年に渡る開発／住区ごとの開発
事業者による記録（図面・写真）が作成／すぐ隣には造成地（未使用地）…大量の記録写真が撮影される
- ・多摩ニュータウン事業の記録写真

【経緯】

- 平成14年（2002）：東京都が多摩都市整備本部を廃止
- 平成17年（2005）：U R 都市機構が多摩ニュータウン開発事業を終了…公的な開発事業の終了
- 平成19年（2007）：東京都多摩都市整備本部事務所（多摩市山王下）の建物解体

平成21年（2009）：U R 都市機構現地事務所（多摩市諏訪）の改組、新宿への移転→現用資料として保管されてきた大量の記録写真が廃棄となり、地元へ寄贈

書籍・冊子・報告書・図面（マイラー原図）…多摩市立図書館

写真…多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）

【種類】

- ・航空写真（垂直）：主に航空測量に用いたもの
 - ・航空斜写真：事業記録や広報用途、主に4×5判フィルムで撮影
 - ・地上写真：事業記録や広報用途、主に35mm判フィルム（ポジ・ネガ）、広報用は中判・4×5判
- 特定の区域が30年以上に渡って撮影され続ける、関係者しか撮影し得ない写真が多数。現在は無くなった景観

3. 多摩ニュータウン事業用写真を「読む」

年代の特定・場所の特定・撮影目的や撮影意図の把握

・パルテノン多摩定点撮影プロジェクト（博物館ボランティア）

①新旧比較写真を撮影することで、地域の過去から現在までの変化とこれからの記録を計画的に残すこと

②新旧の比較により、変化を再確認に新たな「気付き」を見つけること、変化の理由を説明すること

→参加者の大半は多摩ニュータウン開発により越してこられた方々。元の景観は知らないため、素材となる。写真をよく観察、地図などと比べて場所を特定

・「工事風景」からの脱却を目指して…「企画展 多摩ニュータウン建設と重機」の調査より

歴史資料として残されるものが専門分化（多摩N Tの場合は土木・建築設計関係の図面・計算書など）する中で、写真資料はその糸口として極めて重要。

→整理者／活用者／観覧者・利用者の「資料」として写真を見る目線が、現代の地域史／歴史資料としての戦後写真の価値を築いていくはず



現・多摩センター駅周辺／昭和43年



現在の多摩センター駅周辺／平成24年

多摩センター周辺の空中写真、今昔（公益財団法人多摩市文化振興財団所蔵）

多摩の歴史講座の思い出

北村澄江（日野市郷土資料館嘱託員）

昭和の日野について、全体を五つの項目に分け、農村だった日野から、大工場の誘致・大規模団地等の宅地開発が進み、東京のベッドタウンとしての今日を迎える経過を、130枚ほどの写真で辿りました。構成は以下の通りです。

- ① 昭和戦前期の日野（日野町と七生村）玉南鉄道（京王線）営業開始（大正14年）→日野橋開通（大正15年）→七生村が経済更生指定村となる（昭和7年）→東洋時計（オリエント時計）・六桜社（コニカミノルタ）・東京自動車工業（日野自動車）・富士電機・神鋼電機などの大工場が操業を始める（昭和11～18年）→中央線が複線化され日野新駅開業（昭和12年）
- ② 昭和20年代の日野（日野町と七生村）高幡山金剛寺不動堂・仁王門が国の重要文化財に指定（昭和21年）→日野中学校・七生中学校開校（昭和22年）→連合軍総司令官リッジウェイ大將が七生村を視察（昭和26年）→日野町役場完成（昭和29年）
- ③ 昭和30年代の日野（日野町と七生村→日野町→日野市）日野町と七生村が合併して日野町となる（昭和33年）→都立多摩動物公園が開園（同）→多摩平団地への入居が始まる（同）→平山台土地区画整理事業が認可（昭和38年）→日野市市制施行（同）→京王多摩動物公園線開通（昭和39年）
- ④ 昭和40年代の日野（日野市）都立日野高校開校（昭和41年）→豊田電車区完成（同）→中央自動車道八王子―調布間開通（昭和42年）→百草団地入居開始（昭和四十四年）→水田のカドミウム高濃度汚染が判明（昭和45年）
- ⑤ 昭和50年以降の日野 市役所新庁舎完成（昭和52年）→神鋼電機工場閉鎖（昭和54年）→日野桑園閉鎖（昭和55年）→多摩モノレール（株）が発足（昭和61年）

利用した写真は、昭和40年代に始まった市史編さん事業と、それを引き継いだ日野市ふるさと博物館・日野市郷土資料館の活動のなかで、市民から提供された写真や広報で撮影された写真などです。構成にあたっては、ただなつかしい風景を時系列に並べるだけでなく、それぞれの年代のトピックとなる出来事や、開発に伴う問題点なども紹介することに努めました。特に、昭和20年代の日野では、七生地区で生活改善運動に顕著な成果を残した守屋こう氏と、平山小学校における田宮輝夫先生の生活綴り方運動の取り組みを紹介しました。

受講していただいた方々には、当時を知る人たちには懐かしさをもって、知らない世代の方々には、日野にもこんな時代があったのかという驚きをもって受け止められたのではないかと思います。それぞれの時代を写し取った写真資料が語る情報は、膨大でかつ貴重なものです。昭和の、特に戦後の写真は、まだまだ個人の家の中に眠っているものも多く、これからも発掘する努力が必要です。